

# 10年目の再建、ほろ苦く

大谷 成章（フリーライター）

剪画／とみさわかよの

カトリックたかとり教会の再建が始まった。10年前、神田浩神父は「うちには最後でいいんだ。まちが復興してから、その後でいいんだ」と言っていた。

そのころは漢字で「鷹取教会」だったが、焼け跡の敷地にバラックが建ち、ボランティアの救援基地になり、さまざまなNPOの事務所になってきた。つまり、人びとが気軽に集まる場所になつていった。ひらがなになつたのは、そういう背景がある。「ついでに壌も崩れたらよかつたんだがなあ」神田神父は「ボーダレスの教会にしたいのに」と、しつかり残つたレンガ壌をいまいましそうににらんでいた。

「たかとりに先を越された」と長田区御蔵5丁目で自動車部品販売会社を経営する田中保三さんは笑っている。まちづくりボランティア団体「まち・コミュニケーション」の顧問で、御蔵5・6・7丁目自治会の集会所の建設に尽くした。集会所は、但馬の香住から北前船の乗組員宿舎を3年がかりで移築した。

台湾から震災復興の視察にやつてきた彰化縣長（県知事）が「うちにもこのように風格があおしやれなホールも建つた。直径33センチほどの紙の筒を柱にしたテントの屋根の多目的スペースだ。列柱がギリシャの神殿を連想させる。ここに東京の友人たちを震災見学に引つぱ

つてきて、多言語放送局「FMわいわい」や多民族交流支援の苦労を聞いたことがある。

そのペーパードームが、台湾の集集大地震の被災地に移設されて「社区造営」（コミュニティづくり）に役立つことになった。

「たかとりに先を越された」と長田区御蔵5丁目で自動車部品販売会社を経営する田中保三さんは笑っている。まちづくりボランティア団体「まち・コミュニケーション」の顧問で、御蔵5・6・7丁目自治会の集会所の建設に尽くした。集会所は、但馬の香住から北前船の乗組員宿舎を3年がかりで移築した。

台湾から震災復興の視察にやつてきた彰化縣長（県知事）が「うちにもこのように風格があおしやれなホールも建つた。直径33センチほどの紙の筒を柱にしたテントの屋根の多目的スペースだ。列柱がギリシャの神殿を連想させる。ここに東京の友人たちを震災見学に引つぱ

は「大工棟梁水上観治」と書いてあつた。作家水上勉さんのお父さんだつた。

紙管のペーパードームと違つて、木造瓦葺を

台湾に運ぶ準備は時間がかかる。そこで「たかとりに先を越された」となるのだが、使つてもらえる期間は、より長いだろう。

田中さんの会社も全壊。たかとり教会と同じように跡地にバラック数棟を建て、救援ボランティア団体に提供した。「御藏ボランティア村」と呼ばれていた。私は、その一棟で、入居するボランティア団体のために電灯線を取りつけたことがある。無資格の違法な作業だったかもしないが、あのころは電気屋さんの手が足りず、待つていてるわけにはいかなかつた。

そんなころ、田中さんも「まちが復興するまでは会社の建物は後回しだ」と、神田神父と同じことを言つていた。



詩画集『神戸、あの日より—1995・故郷』から掲載 「再開店(東灘区)」

ようやくこの夏、田中社長は再建に踏み切つた。

大災害のときには、避難所だけではなく、まちの人たちが集まり、再建の方向を話しあう場所が大切だ。自治会館のような場所をもつてる地域は、立ち上がりが早かつた。

鷹取や御藏のほかに、月見山自治会館を持っている西須磨地域、田中さんにつかせんしてもらつてコンテナハウスを街角に置いた灘区の琵琶町などは、住民が主人公になつてまちづくりを始めた。琵琶町はこれを「びわポケット」と名づけた。人びとのたまり場であり、希望や願いを集めておく場所であつた。

神田神父や田中社長のほかにも、自分の仕事の拠点の再建を後回しにして、まちの復興に近くしてきた多くの人がいると思う。

たかとり教会の周りにはまだ空き地が多い。御藏の元の住民の「帰還率」は6割ほど。

いま神戸では、「まちの復興はまだできていなければ」とちよつと苦い思いをかみしめながら、そうした人たちが10年目の再建に取り組んでいる。

■大谷 成章（おおたに・しげあき）1939年但馬生まれ。元神戸新聞記者。震災当時は月刊神戸「子震災集者」。その後、フリーライター。「阪神・淡路大震災10年」（共著 岩波新書）など。

# 「五線紙の街」～神戸を彩った人たち～



文・宮田 達夫 絵・中西 省伍

集まりの名前は「バー・ボンクラブ」。毎月一回誰かの家で開く。開いた家の人の料理でバー・ボン・ウイスキーを飲むというのが決まりで、第一回は田宮三郎の家で、彼の手作りの牛のコンタンとキャベツのオイル漬け、牛肉の酢漬け、そしてウイスキーはバー・ボン・デラックスという銘柄で始まった。

メンバーの人物像を紹介すると、中西省伍は中山手にサロン・ド・ナカニシというブティックをしており、デザイン学校の教授、テレビに出て映画評論をしたり。新谷琇紀は彫刻家でお父さんが新谷英夫という神戸有数の彫刻家、妹も彫刻家という一家。

それに神戸の名物長老と言われた神戸文化ホール館長・松井一郎、神戸市市民局長の長島隆、元兵庫県副知事で兵庫県立近代美術館館長・樋崎四郎が参加を望んだ。松井一郎は朝日新聞出身で太っ腹な男で、夕方五時になると館長室を開放して、自称バー「九官鳥」と名付け酒を楽しんでいた。演劇界にはやたら顔がきいた。神戸文化ホールが開館当初成功したのは、松井の力が大きい。樋崎は坂井時忠知事の下で補佐をして、山登りが好きで、ヒマラヤに登山して倒れ、その後病気になった。長島は宮崎神戸市長をしたりして、神戸は自分のテリトリーとして

加藤隆久の家は生田神社の宮司で神社庁の永職会のメンバー。生田神社は神戸の中心をなす神社だ。この頃生田神社に福田宮司という人がいて、メディアを集めていると企画したものを取りしてもらい、生田神社の名前を広めていた。メディアの間では生田神社の外務大臣

いた。三人はすでに他界。

長老をのぞけばいずれも当時四十歳台前後の新進気鋭の芸術芸能家ばかり。芸術家は得てして世界が狭いといわれるが、この集団は集まれば互いにしつこく話し合いどつきあい?、互いに利害がないだけに本音で喋りあつた。

当時の『月刊センタ』に「現代版・村人の集い バーボンクラブ」という題で、次のように田宮三郎は書いている。

ある一室で男たちが集まってウイスキーを飲んでいました。ウイスキーの名前は「バーボン」。バーボンにもいろいろありますが、バーボンデラックスという安いウイスキー。

男1 「神戸に何故にサロンがないんだろう?」

男2 「こうして何となく集まってトーカができる場でいいのに」

男3 「あれもこれもと言わないサロンにしたい」

男4 「集団や団体になってしまっては意味がない間にかバーボンクラブを作ろうという話になりました。

男5 「話題はその時決めればいい、話題がな

ない。あくまでこういう雰囲気でトークができる

男6 「こうして皆、ちがう世界で活躍している者が集まっているところに意義がある。もちろん異人館の話、トアロードの話もいい、バーボンを飲みながらコンクリートしていく神戸をどうしようと考えるのもいい。問題意識を持てばいい。しかし目的を作ることには危険性がある」

男7 「日本人は何となく寄り合ふことに欠けている。神戸にいる人間がふれあえればいい」

男8 「そうだ、我々がかつての神戸を知つている最後の年代だから」

男9 「ではこんなまとめ方でどうだろうか?」

六甲山の緑と海に囲まれた神戸はファンタスティックな街です。この神戸に住んでいる人たちのふれあいの場所を私たちが求めています。違った仕事、異なった世界の人たちが何となくふれあい、お喋りができる所、こんなスペースを作ろうとしています。明日の神戸に向かつて、意識の復活を求めるようとしているのです。

メンバーによる唯一の公演

大画伯こと石阪春生さん



■ 菅田達夫 (みやたたつ) 一九三六年東京生まれ。毎日放送入社、大阪府警・大阪市・万国博などの記者クラブ担当。MBSナウ担当後、報道局兼事業部次長の「足のわざ」で放送記者として宝塚歌舞伎を取材。イベントプロデューサーと会員。フリージャーナリスト。バーボンクラブ



孫

## 出石 アカル

絵・菅原洸人

題字・六車明峰

「こここのコーヒー飲むようになつてから、俺とこの会社いっこもええことないなあ」

朝一番にやつてきて、こんな悪たれ口をたたくのは、近くに事務所を持つ建築会社の社長、

反町さんである。わたしも即座に返す。

「あんたが来るようになつてからや、うちの店がひまになつてしまんは」

このセリフはこの連載の最初のころに書いた。あれからもう三年になるが、彼は今も毎日のようにやって来て、毒舌ぶりは健在である。

「もうええかげんに山へ放したれよ」と言うのは、わたしの家内に対してのいつもの言葉。と

ころが今日は、「おい、アレ！」と指さして「鎖でつないどけ」と言う。さらにはほかのお客さ

んに対しても躊躇ない。店を出てゆこうとする老婦人の後ろ姿に向かつて投げた言葉が「気をつけなはれよ。そこ段差あるからな」である。たつた3ミリほどの段差を指さして言う。それ

でも憎めないのは、決してハンサムとは言えない、西田敏行に似た愛嬌のある風貌のせいだろ

う。

その反町さんの最近の笑い話。

「俺が、血いいっぱい吐いて救急車で運ばれた時のことや。病院で気がついたら、看護婦が、



『連絡したのに奥さんまだ来られませんが』  
『言うんや。明くる日になつてやつと来てくれ  
たから、『なんで昨日来んかったんや』て聞い  
たら、うちの嫁はん、なんて言うたと思う？『来  
たけど、病室の入り口に、面会謝絶を書いてあ  
つたから帰った』って言いよつたんや。あいつ、  
俺のなんやと思どんのやろ』

ホントに面白い人で、いつも笑わせてくれる。  
ところが、経営は結構抜かりなくやつていて、  
実はしたたかな社長さんなのである。

「居酒屋で飲んで、車では帰れんから、タクシ  
ーに乗つたんや。そしたら運転手が、偶然、A  
やつたんや。ちよつと前まで社長やつとつた仕  
事仲間や。ごつつい借金こさえて倒産した奴や。  
そいつが言いよつた。『あのころの仲間はみん  
な首つたり、どつか行つてしまったりやのに、  
お前はドしぶといのう』て」

建築関連の小さな会社は、この不況の中で次々  
と消えて行つているのに、反町さんはそつなく  
業績を上げている様子である。

\* \* \*

話は変わりますが、わたし最近、爺イジにな  
りました。

昨年結婚した娘に、男の子が生まれたのです。  
ちよつと難産でしたが、お陰様で、母子とともに  
元気です。しばらくはわたしの家で静養という  
ことで、今にぎやかなことです。

かわいくてたまらないので、わたしはホッペ

にチューをしてやるのですが、唇への接触は固  
く禁じられているのです。ピロリ菌が感染するか  
らと。娘は、母親の自分もしないと言うので、

わたしも禁を犯す訳にはゆきません。昔わたし  
は、その娘の唇にキップの雨をふらせた前科が  
あるのです。それで胃病や虫歯にかかりやすくな  
つたと言われています。で、唇のそばまで行つてそこで止めなければならぬのがなん  
とも辛いのです。もうわたしは欲求不満の塊にな  
つてしまします。

その赤ん坊を店に連れて出ていた時のことです。件の反町社長がやつて来たのです。えらい  
ことです。

「おう、かわいいのう」は良かったのですが、「お  
母んやお爺んに似んでよかつたなあ」

まあ、このあたりまでは許せますが、次の言  
葉には呆れてしまいました。

「おい、気をつけよ」と赤ん坊の頬をつつきな  
がら言うのです。「うどんのだしにされんよう  
にせえよ」と。

この日は丁度、店の日替わり定食が、うどん  
だつたのです。なんと言う恐ろしいことを。

この人が柄にもなく、いつも自分の孫の写真  
を持ち歩いていて、時に「ちよつとこれ見てみ  
と見せるからおかしい。その時の顔はもうデレ  
デレです。写真の子はかわいいのですが、いた  
ずらっぽい顔が彼にそつくり。何か企んでそ  
な顔に思えてきます。わたしは彼に言います。  
『息子さんに言つたがて。この子は絶対に爺イ  
ジに接触させずに育てるように。そやないと悪  
かれ口が感染するよ』と」

■出石アカル（いづし・あかる）一九四三年兵庫県生まれ。「風媒花」「火  
曜日」（同人）。兵庫県現代詩協会会員。詩集「コーヒーカップの耳」（編集工  
曜日ノア刊）にて、二〇〇一年度第三十一回ブルーメール賞文学部門受賞。

# 銃の中のサムライ

中野 順哉

平田 郁

昭和五十一年二月。ほぼ二年の外遊を終え帰国した僕は空港に着くと、空っぽのトランクをぽんと放り出してその上に腰掛けた。そして垢つぽい首をトレーナーの襟ですっぽりと隠し、冷たい空気を胸いっぱいに吸つた。  
「日本の空気か？美味しいのか、美味しいのか？」

肺にツンと針が刺さるような感覚。欧米のほうが冬は寒かつたようと思うが、ここの大気は相変わらず胸を刺す。ふと周りを見るとミニスカートをはいた女性はもういない。みんな「大きげさ」とも言えそうなロングスカートに身を包んでブーツを履いている。確かにこうに行つてすぐだつたろうか、突然ロンドンでミニスカートが店頭から消えた…という話は聞いていたが、この国の感染力というのはすさまじいものだ。

「それにしても…」僕ははき捨てるように独りごちた。「ロングスカートにブーツ、そしてヘアスタイルはサスーンのショートか。まるで流行のデパートだな。それぞれに何の脈絡もあ

りはしない。ばらばらのパーティが陳列されている。で、この連中が家に帰ればニューファミリーだとか言つて、はきなれないジーンズを親子してはきたがる。ペアルックか？好きになれないな。別にここを歩いている人間が特別感染力の強い連中だとは言えまい。とすれば：やはりこれが平均ということか」

自然とこぶしに力が入つた。やらなければいけないことが山積しているよう思えた。しかし一方で本当にそれを僕はやり通せるのかとう不安にもかられた。

「二年…たつた二年ですっかりルパングの小野田少尉の心境かな？僕はちょっと大きすぎなんだよなあ」

つとめて自分を励まそうとしたが、口元は笑つていても気分は一向にぱつとしなかった。ぐいと伸びをする。重い腰をあげてタクシーに乗る。一旦は神戸の実家で過ごすことになつた。母の申し出であった。あまり氣は進まなかつたが結局は厄介になることにした。

実際に二年というのはこの国にとつて長い時間であったようだ。しばらく何もしないでぼんやりと日々暮らすうちに、この国のすさまじいばかりの変化が徐々に見えてきた。大学卒業者の初任給を見ても明らかだった。昭和四十七年に五万円程度だったのが、帰国してみれば倍に跳ね上がっている。物価が変わり、物の流通が変わり、生活感覚が変わる。電卓が小型軽量化

をめざし価格が安くなつて家庭に入る。カメラにもコンピュータが組み込まれ、誰でもそこそこの写真がとれる。もちろん殆どがカラーテレビで、その普及率は九割を越えている。最近ではそれを録画する機械も出てきた。今は二十万円で売られているが、そのうち安くなつて家庭生活の中に入つてゆくだろう。

確かパリで読んだ本の中に書いてあつたと思



うが、近代化とトイレというのは密接に関係しているそうだ。どれほど生活が合理化しようとも人間は人間という生き物であることには違いない。つまり食事もすれば当然糞尿もする。この動物として当たり前の行為に合理化を施してはじめて人は近代化の道を進むことになる。

都市が出来るためにその前提として、地下に下水道を作り、糞尿が日常生活に登場しないようにする：そうやって生活環境は大きく変化し、人間の思考・哲学も変化してゆくのだそうだ。だとすればこの日本の劇的な変化はどう考えるべきなのだろう。日々生活環境が変化してゆけばそれだけ考え方も変わってくる。もしかしたらそのスピードについてゆけないから、ファンションにしてもただ流行を追いかけるだけで精一杯なのかもしれないな。

電化製品も生活環境も全てパリやニューヨークの方が不便で、不潔で劣っている。決して帰国して「この国は遅れている」なんて思えない。実際「遅れ」てなんかいないので。ただ：「何もないだけだ」

帰国してからというもの、ぼんやりしては独り言を言っている僕を見るに見かねてある日母は、「物件を見つけたからそこを借りてお店をしなさい」と、殆ど命令のような提案をした。彼女が見つけた「店」というのはまだ真新しい新神戸駅のすぐ側で、六甲山を背景に東へ行けば王子公園へとつながる道に面した場所にあつた。決して人通りが多いとはいえないが、その分高級感を演出するには適しているかも知れないと思つた。結局は母に言われるがままに店を

開店する準備を始め、しばらくはそれに没頭した。そしてその年の秋にオープンできるという状態にまでこぎつけた。店の雰囲気はサステーンでもニューヨークでもなく、またパリでもなかつた。

「パリは皆が見栄つ張りだから、自分の姿を鏡に映してまで楽しむ。常に緊張しているようなスペースは日本人には向かない。日本人にとつて美容室は、高級でありますながらも安らげる場所であつたほうが良い」

そこでパリジャンがバカンスを楽しむ南仏の別荘をイメージして、基調は白壁にした。なかなかそのイメージが職人に伝わらず骨を折ったが、仕上がりはまずまずというところだった。あれこれと口やかましく職人に指示を出し、きびきびと動きまわって店作りに没頭する僕の姿を見て、母も妹も、そして疎遠であつた兄ですら驚きの色を隠さなかつた。

「留学というのは流石にすごいものだ。ふらふらしていた子がこうも変わるとは……」皆がそんな目で店の開店を心待ちにしていた。すっかり開店準備が整つた八月の末。僕は新聞記事を片手にひよいと神戸を飛び出して夜の大阪へと向かつた。行き先はある演奏会だつた。その会場は聞いたこともない建物の一室。出かける前に母や知人など周りの人間に聞いても「さあ」と首をかしげるばかり。結局新聞記事を頼りに自力で探すしかなかつた。なんとか会場にたどり着くと冷房が壊れているのかとても暑い。もともとそう沢山のお客が入れない空間にびっしりと人が押し寄せている。

「へえ…しばらく会わないうちに随分お客様  
が増えたんだなあ」

もうすっかり癖になつた独り言を言いながら、  
「延原武春 オーボエ・パロック名曲の夕べ」  
と書かれたプログラムを開いた。マルチエロ、

アルビノーニ、ヘンデル、バッハ、ヴィヴァル  
ディ：有名な作曲家の名前がずらりと並んでい  
る。すべてオーボエと弦楽合奏による演奏だつ  
た。もちろん曲と名前は一致しなかつた。知ら  
ない曲なのか、それとも聞いたことがあるのか  
すら分からなかつたが懐かし  
い曲を聞いているような気が  
した。演奏が済んで控え室を  
訪ねると、果たして彼、延原  
武春はそこにいた。彼は僕を  
見るなり「おう！」と声をあ  
げた。

「帰つてたんか。元気そうやな」

映画館で出会つて以来ゆつ  
くり話したこともないのに、  
彼は長年付き合つている友人  
が戻つてきたかのように懐か  
しがり、食事をしないかと誘  
つてきた。僕は軽く首を縦に  
ふつた。近くのホテルにある  
カフェで食事を取りながら、  
僕はロスのこと、ニューヨー  
クのこと、そしてパリのこと、  
友人と別れることなどを語つた。  
延原は忙しくフォーカクを動か  
しながらも、じつくりと話を  
聞いてくれた。

「まあ、そなんだけれどね。  
「そうち…色々得るところがあ  
つたみたいやな。何よりやな  
いか」



でも一番驚いたのは有馬休六：僕の先生の先生なんだけれどね、その人のことを知つていると  
いう人物にパリで会つたんだ。その有馬休六つ  
て人は、簡単に言えばパーマネントを日本に持  
ち込んだ最初の人なんだよ。その人のこと、今  
では誰もちゃんと教えてくれないんだけれど、  
そのパリにいた爺さんは面白いことを言つてい  
た。つまり：美容師というのは芸術家でもなく、  
技師でもない。サムライの眼をもつていなくち

やならないって。そのことを有馬休六から学ん  
だんだって」

「へえ：サムライの眼か。それはつまり、どう  
いうことなん？」延原はフォークを動かすのを  
やめて、ぐつとワインの入ったグラスを干した。  
「僕にもよく分からんんだ。最初は西洋人独  
特のオリエンタルな趣味かと思つたんだけれど  
：どうも違うんだ。切腹を美しいと感じる感性。  
死を美とする感覚。そういう眼をもつて見るの



がサムライなんだつて。日本の美容師はサムライがやるべきで、それだからこそ面白くなる可能性がある：なんて言うんだ。分かる？」

「いや。でも：何となく分かる：かな」

【本当？】

【多分】

「ははははっ：やっぱり君に話して良かったよ。来月から神戸で店を始めるんだ。その前に誰かにこのことを話しておきたいと思っていた。色々考えたんだけど、君に話すのが一番かと思つてね。なんだか気分がすつきりしたよ」

僕は段々軽い気分になつてゆくのを感じた。「この国へのアファッショニ、何とか確固たる軸を持たせたい。それを自分の力で生み出したい」と意気込みばかりが空回りしていたこの半年。「流行」という言葉を聞けば聞くほど現実の壁の分厚さに打ちのめされそうになつていった。しかしこの目の前にいる男も、良く似た思いで音楽に立ち向かっている。いや、そういうことにに関しては随分先輩になるだろうが、その彼がとても音楽に構えている。まるで着慣れた服をあれこれ楽しんでいるかのようだ。僕もこうでなくつちや。まだ着慣れない一張羅のスリーブで、汗をかきながらネクタイで首を絞めているようじや客も寄り付かないに違いない。

は静かだった。そして食事を一通り終え、コーヒーを注文すると一層まじめな顔つきになつてたずねた。

「神戸で店を出すのか：大阪のほうがよくないの？」

「神戸が良いよ。神戸はね、欧米人が逆立ちしても生み出すことの出来ない街なんだからね」「コンテナが沢山あるからか？確かに…。今じや国内のシェアの五十パーセント以上が神戸やしな：トランシップ港としてもアジアの五十パーセントは神戸がその役割を担つていてるそや。うん、君の見込み通り、今の神戸は上り調子やな」

延原はそう言つて何度も頷いた。しかし僕は同時に首を横にふつた。

「いや全然違うよ、もつと感覚的なことだよ。神戸は西洋文化が生んだんだ。でも日本の都市としての性格を色濃く持つていてるんだ。そういう色彩の中で僕は新しい世界を生み出したいんだよ」

「それもサムライか？」延原はそう言つて運ばれてきたコーヒーに氷ごとお冷を入れてかき混ぜると、ぐつと一気に飲み干した。そして硬い表情のままこう言つた。

「その有馬休六とかいう人、気になるんやつたらいい。何ん行つてみたらどうや、その故郷に。ついでに墓参りでもしたらええのと違うか」

【まさか…】

僕は軽く笑つて受けた。しかし延原は笑つていいなかつた。むしろとても真面目なことを話しているという表情だった。

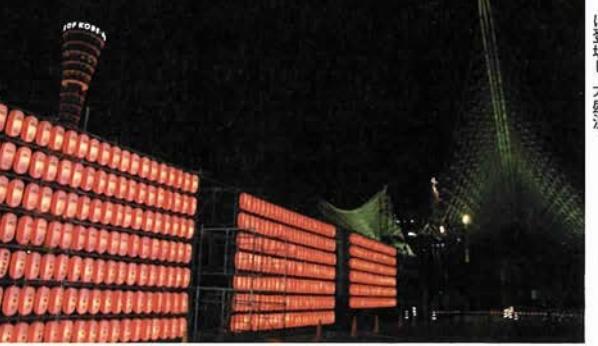
■中野順哉（なかのじゅんや）

一九七〇年生まれ。関西学院大学文学部フランス文学科卒業。日本テレマン協会芸術代行。上方講談の作家でもあり、すでに二〇を超える作品が上演されている。



# みなとまつり2005

夜空に輝く夢提灯、人々の熱気。7月16～18日  
「Kobe Love Port」みなとまつり2005がメリケンパークで開催。アマチコバードの他、アートとして人気バード「キンモクセイ」がステージに登場し、大盛況。



## サンバフェスタKOBE 2005

神戸の街にはやはりサンバ!サンバコンテスト「サンバフェスタKOBE」が7月23日にメリケンパークで開催。チビッ子からムードあふれるサンバチームまで多数参加。



## 「神戸発 小さなホテルの女性支配人が書いた情熱と感動の仕事術」出版記念パーティ

7月15日、ホテルトアロード支配人・永末春美さんの出版記念パーティーがホテルトアロードにて開かれた。書店ビジネスコーナーにてトップ入りもあり抜群のチームワークを誇るスタッフたち。



KFS'05総会  
フレッシュ・ジョン業界の異業種交流会  
／村岡圭会長の2005年総会がサンホテルにおいて開催。

## ムーティーな夜に歌う

サロン・ド・あいりで6月27日に開かれた翔ゆり子のショーに、合田れいがゲスト出演。(ピアノ/小田イタル)





## 生田神社大海夏祭

8月3～5日、生田神社で大会夏祭。静山新静会・風さやか・瀬戸内三郎などのゲストライブやフリーマーケット、恒例ののど自慢大会が開かれた。



## ドンク100周年車いす100台寄付

パンの「ドンク」が創業100周年を迎える記念事業として車いす100台を神戸市に寄付した。8月4日、友近史夫社長が矢田神戸市長に目録を寄贈。保健福祉局を通じて市内の福祉施設などで活用される。



王少飛作品所蔵展  
8月2～7日ギャラリーあじさいにて。非凡な才能があふれる絵画が並んだ。



## 故貝原六一画伯一周忌の集い

ドン・キホーテの絵で知られた画家・貝原六一さんの一周忌にあたる7月29日、御影の中華料理店「黄老」で開催。貝原夫人を囲み、中右瑛、南和好、松本宏さんら画家、門下生らが集い亡き貝原さんを偲んだ。



## クラフトアートフェア選考会

トアロードクラフトアートフェア2005は、10月8・9日に開かれる。8月6日に出展者の選考会が。



月の会8月スタート!  
1回「月の会」が8月1日、「ムンシャイン」で開催。



華麗にダンスを!  
まるでヨーロッパの宮殿でのパーティ。社交ダンスパーティが1月16日、クオリティホテル神戸で開かれた。

いつかまた帰ってきたくなる  
北野の老舗レストラン

# グーニー北野

Kitano Hot News



▲どれをとっても最  
高の素材を使ったグ  
ーニーのお料理

店内に入ってすぐにオーブンキッチンで厨房が見える。  
長年使われているこの炭の釜で、あの絶品・炭焼きステーキが焼かれる▼



■グーニー北野  
神戸市中央区北野町2-7-18 リンズギャラリーB1F  
TEL 078-242-2562  
11:30~14:00 / 17:00~21:00  
(ラストオーダー20:30)  
月曜定休（祝日の場合は営業・翌日休）  
<http://www.goony.com>

元町で誕生して北野へ。今年で33年になる。多くの常連さんに愛されてきた「グーニー北野」。長いつきあいのある肉屋から仕入れた最高の黒毛和牛をはじめ、瀬戸内の魚介、野菜、フルーツなど、何と言ってもその素材の良さが秘訣だ。絶品の炭焼きステーキ、人気のあわびステーキの他、いくつもの料理が楽しめるミュニデキスタンションというスタイルのコース料理には、うにのスープ、魚介のムース、シーフードサラダなど、名物料理が多数。

ディナー6000円~、ランチ4000円~とリーズナブルで、アットホームなサービスなのは町のレストランならではの喜び。



KITANO GARDEN  
北野ガーデン

神戸市中央区北野町2-8-1  
TEL078-241-2411(代表)  
<http://www.kitano-garden.com/>

炭焼料理 西洋料理  
RESTAURANT

Goony  
KITANO

グーニー北野  
神戸市中央区北野町2-7-18  
リンズギャラリーB1F  
TEL078-242-2562

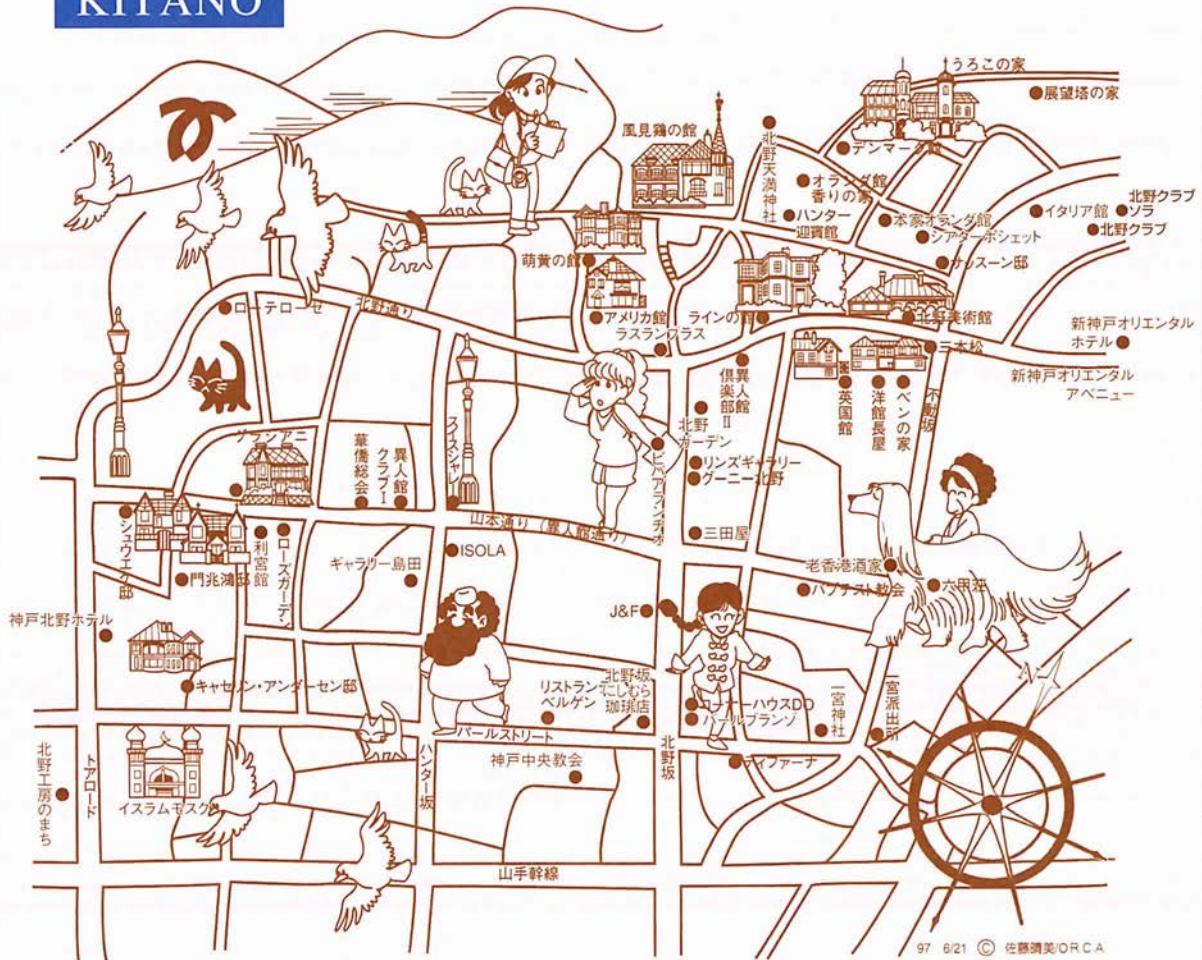


スパニッシュカフェレストラン  
ラス・ランブラス

神戸市中央区北野町3-6-17 アキラビルB1  
TEL/FAX078-222-3740  
<http://www.jin.ne.jp/las/>

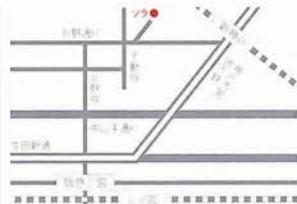
坂のある町・散歩道

KITANO



氣品さと優雅さに満ちたNew Classic

南仏・コートダジュールの地中海を思わせる  
心地いい開放感と優雅な風が、気品を漂う  
ニュークラシカルなヴィラに新たな感動を運んできます。



KITANO CLUB  
**sola**

address:〒650-0002 神戸市中央区北野町1-5-4  
telephone:078-222-5515 fax:078-222-5524  
<http://www.sola-resort.com/> e-mail:[info@sola-resort.com](mailto:info@sola-resort.com)  
hours:平日 11:00-20:00 [水曜日休館] 土・日・祝日10:00-20:00

燐KOBECO PARTY  
KITANO CLUB SOLAへの誘い

# 秋の宴

10月3日(月) 18:00~21:30

グレースヴィラディナー  
お一人様 ¥17,000 (100名限定)

▼お中込み 078(265)0155  
小泉美喜子 090 3359 1792

西脇菜子  
ミュージシャン  
▲ゲスト